

中国古代のイヌの品種改良

Dog Breeding in Ancient China

藤島 志麻

Shima Fujishima

キーワード：唐代、シルクロード、瑞獣、異犬種交配

keywords：Tang dynasty, Silk Road, auspicious beasts, mating of different dog breeds

1. 研究の現状と問題点

イヌの形態は品種によって大きく異なっている。中国の犬種に関する研究では、これまで、パーカー氏らや田名部雄一氏の遺伝子工学による方法が顕著な成果を上げてきた。例えば、パーカー氏らは犬種がまず、「中国・日本品種」と「その他の品種」の二群に分化したことを明らかにし、中国、及び、日本のイヌの固有性を指摘している¹⁾。そして田名部氏は、犬種間の遺伝的位置関係から中国原産のペキニーズが最古の犬種の一つであることを明らかにしている²⁾。

しかし、品種改良の道筋を知る今一つの方法としては、考古資料や文献資料等の分析という、人文学からのアプローチもある。人文学の方法には、形態変化の時期が絞れる、当時の思想や社会状況から品種改良の目的がわかる、という大きな利点がある。

現在の中国古代のイヌに関する人文学的研究は、犠牲に用いられたイヌに関するもの^{3)~5)}と漢代の俑や画像を中心にイヌの家畜としての役割を究明したもの^{6)~8)}の二種に大別できるが、未だイヌの形態変化に着目したものはない。

そこで本稿では考古資料や文献資料等を用い、先史時代から宋代に至る間の、時代ごとのイヌの大きさ、立ち耳であるか垂れ耳であるか、短毛であるか長毛であるかといった特徴をみることによって、中国におけるイヌの形態変化を明らかにし、その上でイヌの品種改良が始まっ

た時期とその目的を探ることとした。

2. 品種改良の始まり

遺跡から出土したイヌ骨によれば、中国では新石器時代から周代にかけてのイヌの大きさに際立った差はみられず(図1)^{9)~12)}、報告書に記載されている頭骨・肱骨(上腕骨)・股骨(大腿骨)について各部位毎に長さの平均をとったところ、頭全長が166.7mm、肱骨長が166.0mm、股骨長が149.1mm^{13)~24)}となった。これを現在の犬種と比較すると、柴犬と同程度、或いは、一割程大きかったことがわかる。

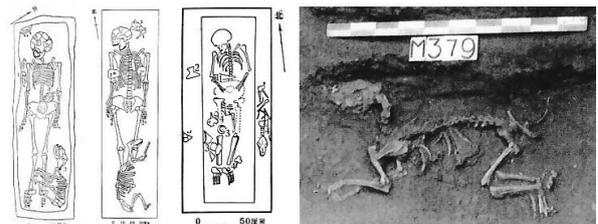


図1 新石器時代～周代のイヌ骨

漢代になると、猟犬・番犬・(犠)性犬といった用途毎の緩やかな改良が行われていたと推察される(図2)^{25)~27)}。



図2 漢代のイヌ俑

魏、晋を経て南北朝時代に入ると、出土したイヌ俑の多くが垂れ耳となる（図3）^{28) 29)}。



図3 北朝のイヌ俑

副葬品は死後の理想の生活を表現したものであるから、垂れ耳の価値が高かったと推察されるが、体格そのものは新石器時代以降魏晋南北朝時代に至るまで際立った変化はみられない。ところが唐代に入ると、それまでの中国にはみられない形態を持ったイヌが出現する。

一つ目は、皇族である李重潤の墓に描かれた中東原産の古代犬とされるサルレーキに似た大型犬である（図4）^{30) 31)}。



図4 李重潤墓壁画のイヌとサルレーキ

二つ目は、宮廷画家周昉の『簪花仕女図』に描かれた現在のパピヨンに似た小型犬である（図5）³²⁾。



図5 上：『簪花仕女図』
下：『簪花仕女図』のイヌとパピヨン
(筆者撮影)

よく似たイヌは、現在のトゥルファンに位置

するシルクロード上の高昌故城に居住していた貴族達の古墳遺跡であるアスターナの壁画にも描かれている（図6）³³⁾。



図6 アスターナ壁画に描かれた童子とイヌ

このイヌは、『旧唐書・列伝・西戎・高昌』に武徳（中略）七年、（高昌国王の）文泰がまた狗の一つがいを献上してきた。狗の高さは六寸、長さは一尺余り、とても慧敏で、上手に馬を曳く（真似をし）蠟燭をくわえてみせた（この狗は）朮菴国の産であるという。中国に朮菴狗がいるのは、これに始まるのである。（武徳（中略）七年、文泰又獻狗雄雌各一、高六寸、長尺餘、性甚慧、能曳馬銜燭、云本出拂菻國。中國有拂菻狗、自此始也。）

とあることから、「朮菴狗」であったと思われる。

「朮菴国」とは、東ローマ帝国（首都：コンスタンチノーブル）のことであり、紀元前4世紀ローマ帝国時代の子供の墓碑にも似たイヌが彫られている（図7）。

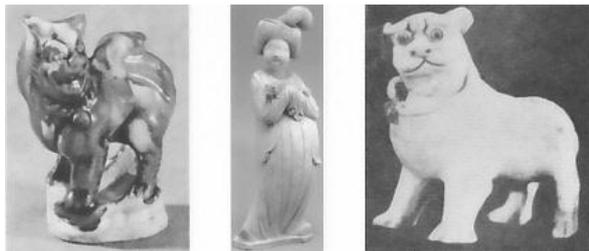


図7 ローマ帝国時代の墓碑に刻まれたイヌ
(トルコ国立考古学博物館にて筆者撮影)

以上のことから、「狛狝狗」がシルクロードを
通って中国に送られてきた贈答品であったこと
がわかる。

そして唐代には、中国独自であり、かつ、そ
れまでの中国にはみられなかった形態を持つイ
ヌが普及していたことを示す副葬品も存在する

(³⁴⁾ ~ (³⁶⁾)。これらのイヌにはいずれも短吻とい
う特徴がある。



三彩狗 加彩婦女俑 短毛イヌ俑
図8 唐代のイヌ俑

また「三彩狗」は、8世紀玄宗皇帝の時代に
軍の官吏であった韓貞という人の墓から出土し
たものであるが、こうした長毛のイヌも、唐代
以前の遺跡からは全くみつかっていない。

韓貞の身分はあまり高いものではなく、さら
に官吏とはいえ、軍所属の彼の墓に軍用犬とは
到底思えない「三彩狗」を副葬させていること
からすれば、8世紀にはこうしたイヌ俑がかな
り普及していたものと思われる。7世紀初頭に
西域のイヌを得た唐代中国人が、犬種の驚くべ
き多様性を知って開始した犬種の改良を、8世
紀までに相当進めていたとみることができる。

3. 品種改良の目的

3.1 ステイタス・シンボル

宋代になると、「狛狝狗」の俑は庶人の墓にも
副葬されるようになり、契丹族が興した遼(916
~1125)の宦官や軍人の墓の壁画にも描かれる

ようになった(³⁷⁾ ~ (³⁹⁾)。

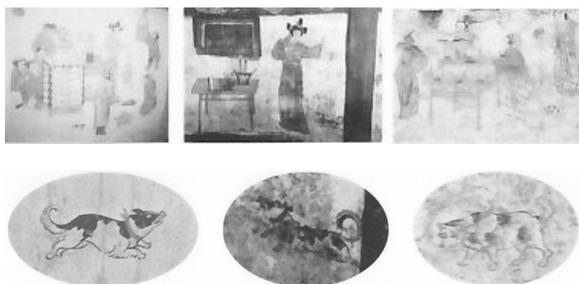


図9 遼墓壁画のイヌ

これらの壁画の背景はいずれも厨房のような
家の裏方であり、「狛狝狗」は女性・子供・使用
人の間にさりげなく描かれているものの、『簪花
仕女図』の「狛狝狗」と同様に小奇麗なりボン
を着けている。壁画を持つ墓を作れるのは富裕
層に限られており、壁画は理想の生活を表現し
たものであるから、さしたる必然性もない場所
に装飾品を着けて描かれた「狛狝狗」の意義は、
ステイタス・シンボルと解するより他にない。
これらの「狛狝狗」が象徴するものは「豊かさ」
であったと思われる。

遼は宋から燕雲十六州を奪うことによって成
った国であるが、文化的には宋からはるかに遅
れており遼の人々もそのことを自覚していたた
め、文化レベルが宋に劣らないことを誇示した
ものとみることできる。

大型犬にもステイタス・シンボル化したイヌ
は存在する。北宋河北の地主の墓に描かれたイ
ヌは、現在のアフガン・ハウンドにも似た見事
な形態をしていた(⁴⁰⁾ (³¹)。

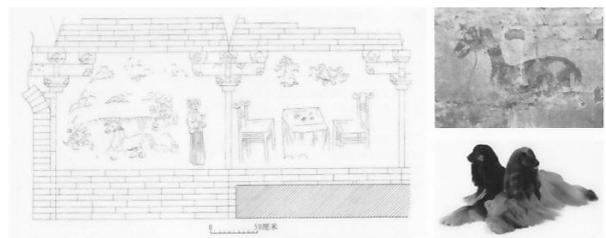


図10 北宋の大型犬とアフガン・ハウンド

中国古代の王侯貴族にとっては、『史記・留侯
世家』に秦の始皇帝の宮殿について

沛公(漢の高祖劉邦)が秦宮に入ったところ、
宮室・帷帳・狗馬・重宝・婦女が千を
以て数えるほどだったので、沛公は内心こ
こにとどまりたいと思った。(沛公入秦宮、
宮室帷帳狗馬重寶婦女以千数、意欲留居
之。)

とあるように、イヌとウマの収集が豪華な建築
や装飾、貴重な宝物、後宮の美女達と並ぶ最高
の贅沢とされていた。『史記』や『漢書』にはこ
れに類する記述が極めて多く、上述の始皇帝の
他、殷の紂王、齊の景公といった歴史上暴君や
暗君とされてきた君主がイヌとウマを集めてい
たとされ、こうした表現が権力者の奢侈ぶりを
批判するための典型的ロジックとなっている。

(図10)が示すものは、宋代には王侯貴族
でなくとも富裕ならば大型の獵犬を手に入れた
か、少なくとも死後の世界で飼うべき憧れのイ

ヌとしてその存在を知っていたということである。

3.2 宗教的意義

第二節でみた「三彩狗」は長毛、短吻で密度の高い尾を持つという特徴がペキニーズと一致している(図11)³⁴⁾。また、「加彩婦女俑」のイヌは長毛、短吻、垂れ耳、巻き尾という特徴がチベタン・スパニエルと酷似している(図12)³⁵⁾

³¹⁾。さらに、長沙の官窯から出土したイヌは短毛、短吻で小さな耳を持つという点がパグに似ている(図13)^{36) 41)}。



図11 「三彩狗」とペキニーズ(筆者撮影)



図12 「加彩婦女俑」のイヌとチベタン・スパニエル

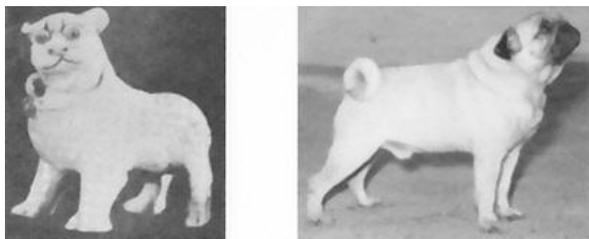


図13 短毛イヌ俑とパグ

ペキニーズとパグは仏教と、チベタン・スパニエルはラマ教と関係が深いとされているが、中国原産で最古の犬種の一つとされるペキニーズについては以下のような問題点がある。

正史にはイヌに関する記述が多く、「犬」、「狗」合わせて2220箇所存在するが、その中に明らかにペキニーズのことを記したと思わ

れるものはない。ペキニーズの作出が相当に古いことは冒頭に述べた田名部氏の研究結果から明らかであるにもかかわらず、正史に記録が残されていないのはいかなる理由によるものなのか。

そこでペキニーズの容貌や形態に着目すると、それが魏晋南北朝時代以来の獣面紋や虎子に酷似していることがわかる(図14)^{42) ~45)}。

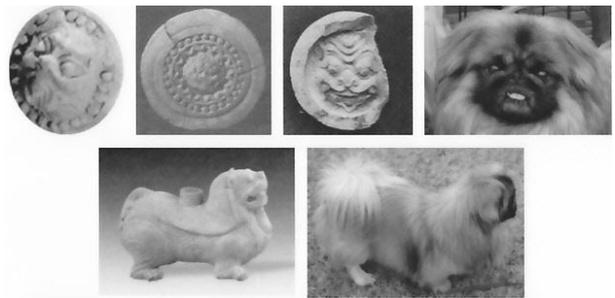


図14 獣面紋(上)・虎子(下)とペキニーズ

獣面は家や人を守るとされるもので瓦などにみえ、虎子は尿瓶であるが形は瑞獣を象ったものが多い。瑞獣は皇帝がよい政治を行った時に天帝が喜びを表わすために出現させると考えられていた、想像上の動物である。

ペキニーズにはまた、鎮墓獣や辟邪の「牙が見える」、「舌が出ている」等の特徴もある(図15)^{46) 47)}。



図15 鎮墓獣・辟邪とペキニーズ

鎮墓獣は墓に遺体を埋葬する際に地の神を鎮めるものである。辟邪は邪悪なものから人を守るものであり、中国で古くから信じられていた瑞獣である。これらは意義(働き)によって与えられた名称であり特定の動物を指すわけではないから、そのものであるかどうかの判断はシンボリックな何らかの形態的特徴によって下される。それが牙や長く出た舌だったのであり、ペキニーズにはこうした特別な動物を想起させる多くの特徴が備わっているのである。

中国には古来、イヌの飼育に携わる役人がいた。『周礼・秋官・犬人』は、祭祀用の牲犬を飼育し、その良し悪しを判断し、各々のまつりに相応しい牲犬を選び提供する、「犬人」という官職の仕事内容について記したものである。唐代にも、『旧唐書・列伝・王毛仲』に

王毛仲は、本来高麗の人である。(中略)玄宗皇帝のしもべとなった。(中略)毛仲は東宮のラクダ・ウマ・タカ・イヌ等の飼育場に通じ、幾年も経たないうちに、大將軍になり、位階が三品ともなった。(王毛仲、本高麗人也。(中略)因隸于玄宗。(中略)毛仲專知東宮駝馬鷹狗等坊、未逾年、已至大將軍、階三品矣。)

とあることから、東宮にラクダ・ウマ・タカ・イヌの飼育場があり、その飼育に従事した役人のいたことがわかる。

正史に明記されているわけではないが、ペキニーズが宮廷のみで独占的に飼育された皇帝所有のイヌであったという点については現代の多くの専門家^{31) 41) 48) 49)}の一致した見解となっている。中には、門外不出であって盗むと死刑に処されたとする説^{31) 41)}さえある。ペキニーズが宮廷で作出されたイヌで、瑞獣と見做されていたならばそれも当然といえよう。資料に残されていない点も、皇帝のみが所有した特別なイヌでほとんど他の者の目に触れることがなかったためとの解釈が可能である。

以上のことから、これら短吻のイヌはいずれも宗教的意義を以て作出された犬種と考える。イヌの形態を極端に変化させてまで架空の瑞獣を現出させたいという古代中国人の動機は、イヌの品種改良の歴史において極めて珍しいものといえよう。

しかし、これらの犬種の自然分娩は困難であるからその改良には非常な辛苦のあったことが予想される。おそらく、母体を犠牲にして仔犬を取るということが頻繁に行われたのであろう。近年、日本では異犬種の交配がブームとなっているが、安易な交配はこうしたイヌとヒトの苦労を無にするものであることを強調しておきたい。純血種に遺伝疾患が出現し易いという問題はあるが、一方で、犬種には歴史的文化的意義という側面もあることを述べ、異犬種交配問題への提言としたい。

引用及び参考文献

- 1) PARKER, H. G. et al. (2004) Science, 304: 1160-1164.
- 2) TANABE, Y (2006) Proc. Jpn. Acad., Ser. B, 82: 375-387.
- 3) 岡村秀典「中国古代における墓の動物供犠」『東方學報』2002年京都第七十四冊:1-181.
- 4) 桂小蘭『古代中国の犬文化』、大阪大学出版会、2005年
- 5) 藤島志麻「周代の墓葬にみるイヌの意義」『古代文化』2009年第60巻第4号:81-101.
- 6) 劉文傑「漢代的陶狗與中国古代的養狗風習」『四川文物』1986年第3期:7-10.
- 7) 益満義裕「イヌから見た中国古代の社会と文化」『東洋学研究』(学習院大学東洋文化研究所2004年第6号:153-181.
- 8) 藤島志麻「周代社会におけるイヌの役割」『風俗史学』2004年28号:48-69.
- 9) 河南省博物館・長江流域规划辦公室・文物考古隊河南分隊「河南淅川下王崗遺址の試掘」『文物』1972年第10期:6-19.
- 10) 河南省博物館・長江流域规划辦公室・文物考古隊河南分隊「河南淅川下王崗遺址の試掘」『文物』1972年第10期:6-19.
- 11) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1969—1977年殷墟西区墓葬發掘報告」『考古学報』1979年第1期:27-146.
- 12) 中国社会科学院考古研究所『張家坡西周墓地』中国大百科全書出版社、1999年:26-38.
- 13) 潘玲「黒竜江樺南県小八浪遺址動物骨骼的鑑定與分析」『考古』2002年第7期:86-90.
- 14) 黄蘊平「内蒙古朱開溝遺址獸骨的鑑定與研究」『考古学報』1996年第4期:515-529.
- 15) 黄蘊平「石虎山I遺址動物骨骼鑑定與研究」『岱海考古(二)』、科学出版社、2001年:489-513.
- 16) 北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所編著鄒衡主編『天馬一曲村』科学出版社、2000年:11153-1169.
- 17) 袁靖・唐際根「河南安陽市洹北花園庄遺址出土動物骨骼研究報告」『考古』2000年第11期:75-81.
- 18) 中国社会科学院考古研究所豊鎬工作隊「1997年豊西發掘報告」『考古学報』2000年第2期:246-254.
- 19) 胡松梅「陝西丹鳳鞏家灣新石器時代動物骨骼分析」『考古與文物』2001年第6期:53-57.
- 20) 半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博

- 物館『姜寨』、文物出版社、1988年:534-538.
- 21) 浙江省博物館自然組「河姆渡遺址動植物遺存的鑑定研究」『考古學報』1978年第1期:97, 101.
 - 22) 中国社会科学院考古研究所・考古科学技術試験研究中心編著『蒙城尉遲寺』、科学出版社2001年:107-109.
 - 23) 祁国琴「福建閩侯县石山新石器時代遺址中出土的獸骨」『古脊椎動物與古人類』第15卷1977年第4期:301-302.
 - 24) 韓立剛「湖北省黄梅县塞墩遺址動物考古学研究」『文物研究』総第9輯1994年11月:31-38.
 - 25) 綿陽博物館・何志国「四川綿陽何家山2号東漢崖墓清理簡報」『文物』1991年第3期:9-19.
 - 26) 郭清華「陝西勉县老道寺漢墓」『考古』1985年第5期:429-449.
 - 27) 稲畑耕一郎・鶴間和幸監修『始皇帝と彩色兵馬俑展』、TBS テレビ・博報堂、2006年:148.
 - 28) 河北省文管処「河北景县北魏高氏墓發掘簡報」『文物』1979年第3期:17-31.
 - 29) 寧夏固原博物館「彭陽新集北魏墓」『文物』1988年第9期:26-42.
 - 30) 陝西省博物館・陝西省文物管理委員会編『唐李重潤墓壁画』文物出版社、1974年
 - 31) ブルース・フォーグル『新犬種大図鑑』、ペットライフ社、2002年:108.
 - 32) 兵庫県立歴史博物館・朝日新聞社『大唐王朝の華-都・長安の女性たち』、「大唐王朝の華-都・長安の女性たち」展全国実行委員会、1996年:100-101.
 - 33) 東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション『シルクロード 絹と黄金の道』、NHK・NHKプロモーション、2002年:67.
 - 34) 朝陽地区博物館「遼寧朝陽唐韓貞墓」『考古』1973年第6期:356-361.
 - 35) 齊藤龍一編『大唐王朝 女性の美』、中日新聞社、2004年:92.
 - 36) 長沙市文化局文物組「唐代長沙銅官窯址長沙」『考古學報』1980年第1期:67-96.
 - 37) 河北省文物研究所・張家口市文物管理处・宣化区文物管理所「河北宣化遼張文藻壁画墓發掘簡報」『文物』1996年第9期:14-46.
 - 38) 張家口市文物事業管理所・張家口市宣化区文物保管所「河北宣化下八里遼金壁画墓」『文物』1990年第10期:1-19.
 - 39) 張家口市宣化区文物保管所「河北宣化下八里遼韓師訓墓」『文物』1992年第6期:1-11.
 - 40) 河北省文物研究所「河北平山県両岔宋墓」『考古』2000年第9期:49-59.
 - 41) 中澤秀章『世界の犬』、成美堂出版、1995年:48.
 - 42) 大同市博物館「大同北魏方山思遠佛寺遺址發掘報告」『文物』2007年第4期:4-26.
 - 43) 雲崗石窟文物研究所・山西省考古研究所・大同市博物館「雲崗石窟第3窟遺址發掘簡報」『文物』2004年第6期:65-88.
 - 44) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城閭闔門遺址」『考古』2003年第7期:20-41.
 - 45) 南京市博物館・南京師範大学文物與博物館学系「南京仙鶴山孫吳、西晋墓」『文物』2007年第1期:22-34.
 - 46) 洛陽博物館「洛陽閔林59号唐墓」『考古』1972年第3期:32-34.
 - 47) 国発〔1988〕5号「国务院關於公布第三批全国重点文物保护单位的通知」『文物』1988年第5期:43-53.
 - 48) 大野淳一『愛玩犬』、保育社、1969年:70.
 - 49) 富澤勝『この犬が一番!』、草思社、1993年:154-155, 132-133.